

第2分科会

協同の力で築く事業と経営

唐渡 興宣 (北海道大学経済学部)

司 会

唐渡 興宣 (北海道大学経済学部)

コメンテーター

鈴木 敏正 (北海道大学教育学部)

小野 正昭 (道北勤労者企業組合)

報 告

北村典幸 (共同作業所全国連絡会北海道支部)

「障害者共同作業所運動の到達点と
「協同」のための展望」

瀬尾英幸 (株式会社くみあい食品)

「くみあい食品の15年の闘い」

吉田儀則 (労働者協同組合おといねっぶ)

「労働者協同組合“おといねっぶ”の
現状と今後の展望」

山田英夫 (日本労働者協同組合連合会)

「労働者協同組合としての基本視点」



~~~~~ 分科会のねらい ~~~~~

本分科会に報告を予定された諸団体は、解雇、高齢化、身体障害者という事情の差異はともあれ、働くことそれ自体を奪われた人々が自分たちの働く場そのものを創り出すことから始まっている。

① 以上のことからまずもって、始められた協同の事業を永続化するための経営の基盤の確保という課題が提起される。北海道でのこうした取り組みの歴史は浅く、その経験の蓄積は十分にない。こうした弱点を克服するために、全国の典型という先進例から学びつつ、また相互の努力、工夫、失敗例から学び合うことによって、事業の初期段階に固有な困難を少しでも少なくし、事業が軌道に乗ることを早めることを必要とする。

② 以上のことを協同の力で実現しようというわけであるが、その協同の力を発揮するためにはどのような措置が講じられているのか。中長期的な目標、計画の作成にあたり、全員の創意がどのように反映されているのか、各人は全体の中での自分の役割、位置が透明になっているのであろうか。

③ 今日、日本の大資本のもとでは、なかば強制され、他方で能力主義的人事考課のもとで相互に競争させられるという働き方の中で、労働者は労働への誇りを奪い続けられている。こうした既存の大企業の

労働現場とは異なる労働の論理とあり方を打ち立てる必要があります。というのは、何よりも協同の力で事業を打ち立てようとしてここに集まってこられている人々はそうした労働現場から排除されているからです。そこには、連帯、配慮、協力、イニシアティブという別の論理が作用しているはずで、協同を実現していく上でどのような人間関係を目指そうとしているのか、そのためにどのようなことがなされているのかが相互に学び合うことが重要です。

④ 協同の事業を実現して行く上で、個々人の成長、人格陶冶がどのように考慮されているのか。今日の日本社会の通念からいえば、この協同を実現しようという人々は決してエリートというわけではない。その意味では、ノン・エリートである人々がどのように自立を遂げていくのかが重要です。そのためには、「雇われ者根性」「下層意識」「労働者としての分限意識」等の克服がどのようにとりくまれているのか。それは個々の労働者が営業活動、経営上の一定の責任を引き受けるというときに大きな障害となるものです。

⑤ 協同の事業を実現するには現場で働く仲間のみならず、家族の支持も必要です。そのために家族ぐるみの交流が必要です。家族ぐるみの交流、相互援助、レクリエーション、相談活動がどのように取り組まれているのか、更には、地域の中でどのような理解と支持を得ているのか。協同という働き方のみならず、その生き方が他の人々に魅力的に映るとき、我々は協同の輪をさらに広げることができます。協同の運動は生活の仕方、生活態度の違いとして周囲世界と異なるあり方をしているものです。ここに地域的階級的コミュニティーとしての労働者世界ができるわけですが、そこに独自の文化と民主主義が養われていくはずで、

(集会当日配布の資料集より)

本分科会に寄せられた諸報告はいずれも意欲に溢れていた。しかし、協同の事業を進めるといふことの歴史の浅さ、更にはそうした集会それ自身が北海道で初めての試みであったという事情のためか、自分達の取り組んで来たことを報告するのが精一杯で、その取り組みを分析し、吟味することが十分ではなかったようにおもえる。協同の事業を進める上で様々な苦勞、困難に突き当たり、それを克服する努力がなされたはずである。勿論そのことについての報告はなされたが、そうした事態にどのように「協同の力」で取り組んだのか、また取り組めなかったのか、その具体的な報告が全体に不足していた。従ってそれら取り組みを具体的にイメージとして浮かんでくるというわけにはいかなかった。これは集会を担った我々の責任であるといってさしつかえない。「分科会のねらい」を5点ほど要約して提起しておいたのであるが、それと報告とが十分でかみ合ってもいかなかったのは、事前に「分科会のねらい」を踏まえた報告者との意志疎通が欠けていたことによるものである。これは基本的にこの分科会のまとめ

を行うべき私、唐渡にある。以上の点は次回以降の集会に不可欠のことと思われる。

それでもいくつか成果はあったと思われる。その点を列挙し、それらについて学んでいきたいと思う。

「働くこと」と「学ぶこと」

まず、障害者共同作業所運動の取り組みからはじめよう。本分科会の当初予定されていた主題は労働者とその労働の場で主体、主人公になるということはどういうことであるか、ということであった。協同組合とりわけ生産者のそれこそは労働者をそうしたものに導いていくはずだということが我々、とりわけ私にはあった。だが、共同作業所の側から「議論が広くなりすぎないか。様々な点でハンディ・キャップを持った人、あるいは子ども達が主人公になるという場合、それはどうなるのか」という指摘をうけて、以上のような名になったのである。労働者が主人公になるということはその意味で我々の依然として学ぶべき課題としてこの集会の隠された主題とされた。そのこと

をこの分科会からも学び、労働者が主人公になるということの内容を獲得していこうということが分科会の課題とされたが、共同作業所の報告は一つの重要な教訓を私達に示してくれた。共同作業所運動はなによりも教育権保障運動から始まったということであった。当初は教育という視点から始まったとはいえ、そこには重要な示唆がある。障害を持った子どもたちにとって、働くことは同時に学ぶことでもあった。働くことは同時に学ぶことであるということ、我々は労働者が主人公になるということの原点を教えられたような気がする。我々は協同組合というのは労働者が自発的な協力とイニシアティブをもって遂行するものとまずは考えていたのであるが、それはもっと素朴なところからの出発なのである。「働くこと」＝「学ぶこと」には多様な事が含まれている。単に仕事の仕方のみならず、他人との協力関係、全体の経営、その他の一つ一つが学ぶことなのである。冷や水を掛けられた思いがするのは私だけだろうか。

合理的な経営と経営者、その育成

協同の取り組みには紆余曲折があり、単純にはいかないのだということを見せてくれたのが「くみあい食品15年間の闘い」であった。15年という経験はさすがに具体性に満ちた報告であった。企業倒産ついでその自主再建というお定まりのコースはよくある話しではあるが、それが今日の年商10億以上という業績に至るには単なる情熱、信念だけではいかないのだということを見せてくれたのがその報告であった。単純に協同ではいかないというのは、その取り扱っているのが商品だということにある。「商品は暴走する」という言葉で述べていたように、商品が2000種類を越すと、商品管理の専門的知識と技術を必要とする。それが欠けていた間は経営は混乱を極めた。更には自己の事業の性格、取引先、経営体の在り方、それらを分析しそれに対応した対策を具体的に講じることが必要とされたのである。合理的な経営と経営者がなんとしても必要なのであり、また育成して

いかなければならない。もう一つ深刻な問題は人間の問題であった。自主再建という危機感と燃えるような情熱ではじまったとはいえ、人はその日から協同の戦士になるわけではなく、倒産以前のそうしたことを予期もしなかった、そこにほり出された人間から出発しなければならないということであった。使い込みをし、持ち逃げするものもでてくるのであって、設立されたばかりの会社の経営危機が生じることもあった。「人間性の認識の不足と甘さ」という言葉で要約されていたが、そこには私情を排した、人間の管理もまた必要とされるのである。「経営会議」という協同の母体はもちろんある。しかしこれだけで協同の事業と経営はいかないのであって、合理的な経営者は不可欠であり、その経営者の経験、知識、技術の蓄積、情熱と責任感これらに支えられないと経営は成り立たないのだという厳粛な事実を知っておく必要があることを報告は強調していた。協同の事業といっても様々な人間で進めるのであって、初めから優れた協同組合主義者で行われる訳ではない。人はそうした中で学び、傷つく事も伴いながら成長していく訳で、経営者の問題は避けて通れない通過点であろう。労働者が主人公になるということは経営者とか管理者になるということを直ちに意味するわけではない。しかしそうした役割を担って行くことが可能な人間も形成されなければならないということも事実である。

技術・事業の高度化と公共性

我々は資本主義社会の中に生きている訳で、その中で事業と経営を成り立たせていかなければならない。この点では労働者協同組合『おといねっぶ』もくみあい食品と同じ問題に突き当たった。『おといねっぶ』はまさに生産者協同組合として始まったのであって、なによりも生産に伴う技術が必要とされた。事業内容は羊羹と木工品であって、羊羹の製造技術の取得のために京都まででかけて学び、鎌倉の上生菓子「美鈴」の技術を継承し、北海道の小豆を活用した総手作りの羊羹を製造できるまでに技術をたかめた。労働者が自己の

労働条件のみに関心をはらっている限りではそうはいかない。労働者が「雇われ者根性」を克服し協同の事業を担って、自分達の役割を引き受け、自立していくには、「学ぶこと」にささえられなければならないのだ。木工品も趣味の域をはるかに超えるものになりえた。こうした事業が成り立つためにはそれが周囲の人々に必要とされる公共的性格をもたなければならないということである。その点では過疎対策をすすめる自治体の協力は見逃すことはできない。資金の援助、機械の貸与、器具購入の援助、商品宣伝のリーフレットの作成など極めて重要な事例を示してくれている。くみあい食品は「その企業を社会が必要としないから赤字になる」と述べていたが、協同組合は社会に支持されるものでなければならない。その点ではいくつかの企業組合が自治体との協力関係にあることを指摘していたが、協同の事業、経営は自治体との協力関係をどのように作り出すのか重要であるし、まだ十分に自立できていない場合には特にそのことを必要とされるであろう。

全国の労働者協同組合運動は、昨年、日本労働者協同組合連合会がICA（国際協同組合同盟）に加盟したのを機に、一層、本格的な展開を図るべく、多様な取組みを進める中で、高齢者問題やゴミ問題といった、差し迫った国民的課題への積極的、且つ現実的な政策提言も行っている。

北海道においても、従来の狭い地域的な事業団運動の枠を突破して、全国の動きに連動しながら、各地の事業団を統合すると同時に、労働者協同組合として再出発する方向がめざされている。

労働者が出資し、管理・運営し、地域に役立つ事業を行う労働者協同組合は、働く者にとっての今日の閉塞的な社会状況に一石を投じ、新しい働き方・生き方を世に問うものとして、各方面からの関心と注目を集めつつある。

今後、各地に根ざした労働者協同組合が、全国的なネットワークを広げ、強めていく上で、北海道の果たす役割と位置づけは大変重く、既存の事業団を中心とする労働者協同組合化をはじめとした果敢な活動が大いに期待されている。

さらに働く場の創造を

『おといねっぶ』の場合もくみあい食品と同じような商品管理の問題、販売体制の不安定性と生産の非効率性の問題にいま遭遇しているが、このような問題が今後は分科会で討論され、協同組合ならではの解決の仕方を示してくれることを期待するものである。本分科会には曾我プリント（障害者共同作業所）、旅システム・劇団こぶし座という協同の事業を進める仲間達、中高年事業団（石巻、砂川）企業組合（旭川）、国労闘争団、機関紙印刷、女性の自立を協同の事業に託す女性史研究会、コープさっぽろ、労働問題・協同組合問題の研究者、の参加をえられた。この人達の報告もいずれは実現され、様々な所での努力の交流が行われることを期待するものです。

本分科会は解雇、高齢化、身体障害という事情の差異は様々であるが、いずれも働くことそれ自体を奪われた人々が働く場そのものを作り出すという運動の交流の場であった。その意味では労働権、生存権を賭けた闘いの報告の場であった。この運動は一時的なキャンペーン、運動戦で終わる性質のものでは決してない。長期の持続的な陣地戦という性格のものである。協同の事業と経営はついにこの人達が発見したやり方である。この運動にながしかの貢献ができるとしたならば、この集会がその都度この運動を励まし続けていくことであろう。その意味では、まず初めての集会としてはささやかではあるが貢献できたのではなかろうか。

参加者の感想

杉山均 労働者協同組合おといねっぶ
自主生産、自主販売を進めていく上で協同組合化することでの優位性やくみあい食品の経験等々大変勉強になることができました。
2回目以降のテーマの掘り下げやフリー討論等さらに充実されることを期待します。